

謡う世界の川口衛先生

朝倉幸子 TH-1

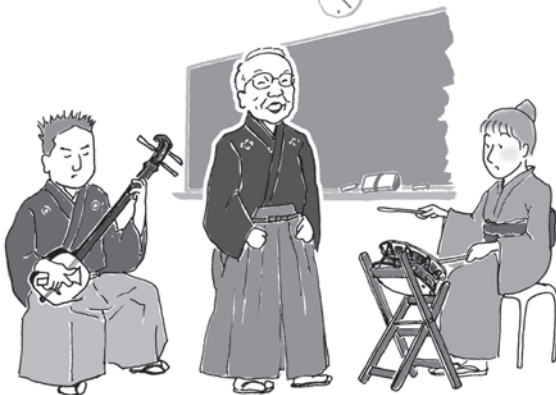
illustration: 向井一貞

■ タンクにチョークで

川口衛構造設計事務所の整然とした打合せ室では、「黒板」が出迎えてくれて、ホッとする。最近、身体に悪いからという大義名分で、大学ではチョークを持たせてくれない。43年間の法政大学での教鞭時代はチョークを通して「何ともない」ことを証明しているのに、とおっしゃる。はて、チョークと先生の関係は単に「白板に水性マジックはキライ」だから、ということではないのでは……。

大学進学寸前の昭和25年に、空襲や震災で家屋を失い苦労続きだったお父上を亡くされてしまう。母親でさえ、長男には敬語で話したという時代です。家長としての責任、その日から家業の銭湯「日乃出湯」を継がなければならないのでした。

進学は地元の福井大学に変更して、唯一面白そうに思えたという建築学科を選ぶ。お若い頃から決断力抜群の方のようです。通学前に製材所に荷車を引いて燃料を確保、授業が終ると夕方からはかま焚き、閉店後は風呂の掃除をしてから就寝という、大学生と銭湯業の両立。衛青年がボイラーに木片を投げ込みながら、目の前のタンクにチョークで構造力学を描いて復習している姿……目に浮かびますね。頭脳明晰に加えて、単純作業をしながらの思考と勉強、マイナスをプラスに変える絶妙なバランス感覚は、構造計画と重なるようです。



■ 「民謡をよろしく」

当時の地方大学には珍しく、吉田宏彦教授は、デザインもできるしスケッチも巧い天才肌の方で、ドイツ語は本場仕込み、ピアノも弾けてかつ民謡の愛好者でもあった。尊敬する師から学問と民謡と、福井大学では大きな二本柱を得られたのでした。

「東大の大学院へ行くなら、友人の岸田日出刀教授に紹介しよう」という吉田教授の紹介状を持って、上京したその脚で教授の元へ。それを読んだ教授は、大笑いされた。なんと「構造を」ではなく「民謡をよろしく」と書かれていたそうなのです。岸田教授といえば建築界の権威あるお立場。愛好する「相川音頭」を謡えないゼネコンの偉いさんはいなかったというから驚く。突然連れて行かれた赤坂の料亭での「相川音頭愛好会」には、100人以上の建設マンがズラリ。上座の岸田教授の横で謡う、初々しくも堂々とした学生服姿の川口先生でした。

■ ドイツで拍手喝采

日本人としては、建築家・丹下健三に次いで、シュツットガルト大学の名誉工学博士を1997年授与された時のこと。国民性のある出し物を用意してほしいと言われて、浅草「民謡酒場・追分」で修行中の吉田良一郎さんを同行することにした。喜ぶ若き津軽三味線奏者は、ブレイク前の吉田兄弟の兄。彼らが海外で活動するキッカケをつくった旅だったのかもしれない。50年以上の長い親交のある女将も「踊ります！」と同行。息子の川口健一東大教授夫妻も「太鼓を叩きます！」。相川音頭や花笠音頭、秋田船方節など披露して、「こんなさばけた構造家は、ドイツにはいない」とウケにウケたという語り種です。

川口先生を囲む同好会の「衛謡会」、先生の「相川音頭」が温かく皆の心に響きます。「誰でも一緒に民謡を楽しむ会で制約は何もないけど、唄うときには歌詞を見ないで」とおっしゃる……。レパートリー100曲以上の謡い手だからこそそのお言葉ですね。

「構造を選んだのは、父が面白そうにやっていたから」と、健一先生。謡う「よされ節」に手拍子をされる川口衛先生の寛いだお姿に、設計された数々の建物のフォルムが重なって、贅沢な夜が更けたのでした。